

東京外国語大学 2011 年度後期市民聴講生を
対象とする学習実態調査報告書

市民聴講生の 5W1H

2012 年 3 月

「生涯学習論」聴講生研究グループ

小笠原道雄・小嶋光恵・坂本明美・土田晶子

代表 谷 和明(科目担当教員)

目 次

| | | |
|-----|-----------------------------|----|
| I | 今回の調査の概要----- | 1 |
| II | どんな人が学んでいるか—市民聴講生のプロフィール--- | 1 |
| III | 学びとキャンパスライフ----- | 4 |
| IV | 聴講生の期待と希望----- | 9 |
| V | 調査から見えてくるもの----- | 13 |

巻末付録 「市民聴講生アンケート調査」質問票

I 今回の調査の概要

- 1 調査期間:2011年12月6日～23日
- 2 調査方法:質問票による調査(質問票は手渡し直接配布し、回答後指定した投函箱への投函)
- 3 調査対象:2011年度後期市民聴講生
- 4 調査内容:付録「調査用紙」参照
- 5 有効回答数:47名(調査対象者総数128名の35%。質問票配布者68名の69%)

今回の調査は、東京外国語大学オープンアカデミーの市民聴講生制度を活用して学習している市民を対象に、その学習者としての実態を解明することを目的とし、市民聴講生開放科目「生涯学習論Ⅱ」を受講している市民聴講生4名によって企画、実行されたものである。

調査は質問票に対する無記名回答を集約し、分析する方法で行われた。質問票は、12月上旬の2週間に市民聴講生の受講教室に出向いて手渡した。全教室を網羅することはできず、欠席者もいたが、聴講生実数128名(推定)の半数強の68名に配布できた。質問票を受け取った受講者は、調査に好意的・協力的であり、短期間、しかもほとんど広報なしという状況であったが、47名という高い回収率(69%)であった。

47名という回答者数は、市民聴講生実数の35.%(男性25/53=47%、女性22/75=29%)にあたる。また、回答者が受講している科目の合計は35科目となり、市民聴講生受講科目53の66%をカバーしている。

II どんな人が学んでいるか —学習者のプロフィール—

1 性別と年齢

回答者は男性25、女性22、計47名であった。そのうち年齢未記入3名を除いた44名に関して性別、年代別構成を示したのが表1である。年齢構成の男女差が明確に見て取れる。年齢は、男性で61～81歳(平均69.7歳)、女性で41～70歳(平均56.5歳)であり、女性のほうが一世代以上若いことがわかる。

表1 回答者の性別、年代別構成

| 年齢 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
|------|----|----|----|-------|-------|-------|
| 40歳代 | | 6 | 6 | 0.0% | 30.0% | 13.6% |
| 50歳代 | | 5 | 5 | 0.0% | 25.0% | 11.4% |
| 60歳代 | 10 | 6 | 16 | 41.7% | 30.0% | 36.4% |
| 70歳代 | 13 | 3 | 16 | 54.2% | 15.0% | 36.4% |
| 80歳代 | 1 | | 1 | 4.2% | 0.0% | 2.3% |
| 合計 | 24 | 20 | 44 | 100% | 100% | 100% |

人生全体を第Ⅰ期(学校教育終了までの自己形成期)、第Ⅱ期(就労・家庭形成など社会的生産期)、第Ⅲ期(余暇と自己実現期)に区分することができる。今回調査では職業や社会活動の有無に関する設問がなかったため、断言はできないが、男性はほぼ全員が第Ⅲ期に属するのに対し、女性では半数以上が人生第Ⅱ期の課題にチャレンジしている途中であるといえよう。子育てや仕事を続けながらの現役専業主婦やパートタイマーも含まれるだろう。第Ⅱ期の男性がいないことは、平日の日中に受講するのが困難なこと、あるいはそのようなニーズの低いことを示しているといえる。

男女間の年齢差が非常に大きいこと、今回の調査を分析するに際しては、男女間の相違と世代の相違が重なっていることに注意する必要がある。そこで、男性、女性それぞれをより若い層とより高齢の層に二分し、全体を4グループに分けてみる。つまり、男性の場合には60歳代(10名)をより「若い男性層(MY)」、70歳代以上(14名)を「より高齢の男性(ME)」、女性の場合には4～50代(11名)を「より若い女性層(FY)」、60代以上(9名)を「より高齢の女性層(FE)」と4つに区分し、以下の考察でも、必要に応じて、このグループの別を考慮してみる。この場合女性の70歳代3名は70歳なので、MYとFEはほぼ同世代といえることにも注意すべきだろう。

2 居住地域と通学時間

聴講生の居住地は都外も含めた17市・区に及んでいる(表2)。アクセスの便利さは生涯学習機会利用の一般的傾向であるが、やはり近隣4市の占める割合が高い。なかでも男性にその傾向が強い。一方、遠方の23区域や他県から通学するのはほとんど女性である(表2-2)

| 居住地 | 男 | 女 | 計 |
|-------|----|----|----|
| 府中市 | 11 | 5 | 16 |
| 調布市 | 6 | 4 | 10 |
| 小金井市 | 1 | | 1 |
| 三鷹市 | 1 | 1 | 2 |
| 国分寺市 | 2 | 1 | 3 |
| 西東京市 | | 1 | 1 |
| 立川市 | 1 | | 1 |
| 昭島市 | | 1 | 1 |
| 町田市 | 1 | | 1 |
| 練馬区 | | 2 | 2 |
| 杉並区 | | 1 | 1 |
| 北区 | | 1 | 1 |
| 荒川区 | | 1 | 1 |
| 川崎市 | | 1 | 1 |
| 横浜市 | | 1 | 1 |
| 新座市 | | 1 | 1 |
| さいたま市 | 2 | 1 | 3 |
| 計 | 25 | 22 | 47 |

近隣4市の中では府中市と調布市の多いのが際立っている(表2)。外大は府中市に立地するが、調布市、三鷹市、小金井市の3市から極めて近い所に位置する。府中市は別として地理的な条件は3市ともほとんど変わらないが、その中で調布市が突出している。地域の大学としての認識の違いによるものであろう。他市も広報活動のありかたや、住民意識の向上によって大いに変わりうると思われる。

近隣居住者が多いため、通学時間も30分以下が半数近くであり、大部分が1時間以内だが、1時間超の遠距離通学をする女性もいる。そこには明確な目的意識が感じられる(表3)。

通学手段についても、近隣居住者が多いことを反映し、徒歩あるいは自転車を通う受講生が45%、公共交通を利用がする人が55%となっている。公共交通手段利用者の比率は女性がやや高くなっている。(表4)

| 所用時間 | 男 | 女 | 計 |
|-------|----|----|----|
| 15分以下 | 6 | 3 | 9 |
| 30分以下 | 9 | 4 | 13 |
| 1時間以下 | 8 | 8 | 16 |
| 1時間超 | 2 | 7 | 9 |
| 計 | 25 | 22 | 47 |

| 区域 | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
|---------|----|----|----|------|------|------|
| 近隣4市 | 19 | 10 | 29 | 76% | 45% | 62% |
| その他多摩地域 | 4 | 3 | 7 | 16% | 14% | 15% |
| 23区 | | 5 | 5 | 0% | 23% | 11% |
| 他県 | 2 | 4 | 6 | 8% | 18% | 13% |
| 計 | 25 | 22 | 47 | 100% | 100% | 100% |

| 通学手段 | 男 | 女 | 計 |
|------|----|----|----|
| 徒歩 | 5 | 3 | 8 |
| 自転車 | 7 | 6 | 13 |
| 公共交通 | 13 | 13 | 26 |
| 計 | 25 | 22 | 47 |

3 学歴

市民聴講生の8割以上が大卒以上であり、高学歴層が受講していることがわかる。特に男性にその傾向が顕著である。

生涯学習は万人の学習機会均等を目標とするが、実際には「教育を受けた人はより教育を求める(education, more education)」という傾向があることが指摘されて久しい。それが見事に実証された形である。そのなかで、女性の場合には、新たに大学にチャレンジする人が比較的多いことが注目される。

| | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
|-------|----|----|----|--------|--------|--------|
| 大学卒 | 21 | 14 | 35 | 84.0% | 63.6% | 74.5% |
| 大学院修了 | 2 | 1 | 3 | 8.0% | 4.5% | 6.4% |
| その他 | 2 | 7 | 9 | 8.0% | 31.8% | 19.1% |
| 計 | 25 | 22 | 47 | 100.0% | 100.0% | 100.0% |

注: その他の内訳は短大、専門学校、高校卒業と大学中退

4 聴講制度の情報源

市民聴講生制度に関する情報源としては、インターネットが、特に男性の場合多い。それに対して女性ではコミュニケーションを伴うクチコミも多く、日常的な人間関係が豊かであることを示している。

その他としては、「友人の勧め」、「大学からの案内」などがあった。

表6 聴講生制度の情報源(複数回答あり)

| | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
|---------|----|----|----|-------|-------|-------|
| インターネット | 10 | 7 | 17 | 38.5% | 30.4% | 34.7% |
| 市報など | 6 | 4 | 10 | 23.1% | 17.4% | 20.4% |
| クチコミ | 3 | 7 | 10 | 11.5% | 30.4% | 20.4% |
| その他 | 7 | 5 | 12 | 26.9% | 21.7% | 24.5% |
| 計 | 26 | 23 | 49 | | | |

5 聴講の動機

教養の向上をあげた人が男女とも5割近くで最も多い。それに次いで多いのが、女性では専門知識技能の習得、男性の場合は余暇の活用と対照的な相違を示している。これは、男女間の年齢や学歴の差による学習動機の相違を現している。同時に、家事労働に対する分担や意識の違いから、余暇の捉え方そのものに男女の差があることにも留意すべきであろう。

仲間作りは予想外に少なかったが、大学での学習の特徴といえるかもしれない。

その他には、「これまで習得した知識の整理と敷衍」などがあった。

表7 聴講の動機(複数回答)

| | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
|--------|----|----|----|-------|-------|-------|
| 専門知識技能 | 3 | 8 | 11 | 8.8% | 42.1% | 20.8% |
| 教養の向上 | 16 | 9 | 25 | 47.1% | 47.4% | 47.2% |
| 余暇の活用 | 11 | 1 | 12 | 32.4% | 5.3% | 22.6% |
| 仲間づくり | 1 | | 1 | 2.9% | 0.0% | 1.9% |
| その他 | 3 | 1 | 4 | 8.8% | 5.3% | 7.5% |
| 計 | 34 | 19 | 53 | | | |

6 外大選択の理由

どうして東京外国語大学を選択したのかに関しては、家から近いことが最も多く、居住地や通学時間での回答結果が裏打ちされている。受講料の適正さについてもかなり(1/4)の受講生が重視している。

その他には、「出身大学だから」、「レベルが高い」などがあった。

表8 外大選択理由(複数回答)

| | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
|--------|----|----|----|-------|-------|-------|
| 学生生活体験 | | 1 | 1 | 0.0% | 3.4% | 1.5% |
| 大学施設利用 | 2 | 2 | 4 | 5.4% | 6.9% | 6.1% |
| 家から近い | 16 | 10 | 26 | 43.2% | 34.5% | 39.4% |
| 受講料が適正 | 9 | 8 | 17 | 24.3% | 27.6% | 25.8% |
| その他 | 10 | 8 | 18 | 27.0% | 27.6% | 27.3% |
| 計 | 37 | 29 | 66 | | | |

7 市民聴講生経験年数

聴講2年目以上が2/3強であり、リピーターの多いことが確認できた。大学は4年で卒業だが、それを超えて「在学」している聴講生が25%を超えている。2002年度に市民聴講生の試行がスタートして以来の10年選手も2名いる。

表には現れないが、聴講を中断した後再開している事例は極めて少なかった。

リピーター度は科目分野によって大きく異なっている。聴講生の平均聴講期間は3.6年だが、言語分野は2年、社会分野は4.6年、文化分野は3.9年だった。社会、文化分野では多様な科目を受講する長期リピーター化の傾向が顕著なのに対し、言語分野では特定科目を学習したら「卒業」する聴講生が多いことを示している。言語分野の中でも特定外国語学習科目だけを取り出すと、平均1.8年とさらに短くなるのである。

表9 聴講経験年数

| | 男 | 女 | 計 |
|--------|----|----|----|
| 1年目 | 7 | 8 | 15 |
| 2年目 | 1 | 2 | 3 |
| 3年目 | 4 | 3 | 7 |
| 4年目 | 5 | 5 | 10 |
| 5年目 | 1 | 1 | 2 |
| 6年目 | 1 | | 1 |
| 7年目 | 2 | 2 | 4 |
| 8年目 | 2 | 1 | 3 |
| 9年目 | | | 0 |
| 10年目 | 2 | | 2 |
| 計 | 25 | 22 | 47 |
| 再掲 3区分 | | | |
| 1年未満 | 7 | 8 | 15 |
| 4年未満 | 10 | 10 | 20 |
| 4年以上 | 8 | 4 | 12 |

Ⅲ 学びとキャンパスライフ

1 聴講科目数と科目分野

各聴講生が何科目受講しているかを示したのが表 10 である。全体では 1 科目だけの受講者が 60% 近くであるが、女性だけを見ると複数科目受講者が多数派となり、3 科目受講者も 3 割以上いる。男性では 1 科目受講者が圧倒的で、3 科目受講者がいないのと対照的である。男女間の受講科目数の差は、平均科目数を見れば一目瞭然である。その理由としては年令差、学習の目的・動機・意欲の差、時間的余裕の差などが考えられる。

| | 男 | 女 | 計 |
|-------|------|------|------|
| 1科目 | 18 | 10 | 28 |
| 2科目 | 7 | 5 | 12 |
| 3科目 | | 7 | 7 |
| 計 | 25 | 22 | 47 |
| 平均科目数 | 1.28 | 1.86 | 1.55 |

それを検討するために、1 ページ末で示した 4 つのグループごとに、人数、受講科目数および受講科目分野(次ページの表 14 参照)を示したのが表 11 である。受講科目数を人数で割った 1 人平均受講科目数を比較すると FE(2.3) > FY(1.6) > MY(1.4) > ME(1.2) となる。男性では若い層のほうが多くの科目を受講しているのに対し、女性ではより高齢の層が多く受講していることになる。が、ここで注意したいのは FE がほぼ 60 歳代で、MY と同世代とみなしうることである。そう考えれば、男女とも 60 歳代の層がより多くの科目を受講できる状態にあるということが出来る。それより若い女性層は科目を精選する傾向があり、高齢の男性層は徐々に受講科目を減らしていくといえるだろう。

| 属性 | 人数 | 受講科目数 | 分野別内訳 | | |
|----|----|-------|-------|-------|-------|
| | | | 言語 | 社会 | 文化 |
| MY | 10 | 14 | 21.4% | 50.0% | 28.6% |
| ME | 14 | 17 | 5.9% | 47.1% | 47.1% |
| FY | 11 | 18 | 55.6% | 27.8% | 16.7% |
| FE | 9 | 21 | 28.6% | 28.6% | 42.9% |
| 計 | 44 | 70 | 28.6% | 37.1% | 34.3% |

受講科目の分野をみると、FY は言語分野が際立って多いが、その場合に特定の言語に絞って受講する傾向が強いのである。MY と FE というほぼ 60 歳代の男女を比較すると、言語の比率は共に 20% 台と少なくなり、最大の分野が男性では社会、女性では文化と、対照的である。けれども、男性もより高齢の ME では文化分野が増加している。つまり、年代が上がるにしたがって言語、社会、文化の順に比重が移行することがわかる。

表 12 を見てみよう。男性は年齢幅が小さいこともありほとんど差が見られないが、女性の場合は年齢に応じて受講科目が言語、社会、文化へとシフトする傾向が明らかに見て取れる。

| 分野 | 男性 | 女性 |
|----|------|------|
| 言語 | 68.3 | 54.1 |
| 社会 | 70 | 60 |
| 文化 | 69.4 | 63 |

2 学習状況

表 10・2 は、各受講者が、科目分野や受講科目数に関係なく、自分の受講科目に関してどの程度の学習をしているかを示したものである。これをみると、予習は 6 割近く、復習は 6 割以上、関連した学習は 9 割近くと、多くの聴講生が授業時間以外にも主体的に学習していることがわかる。そのなかで、予習、復習に関しては男性の学習率が低く、しかし科目に関連した学習では男性の学習率が高いという特徴がある。けれどもこれは、男女の学習スタイルの相違というよりも、男性、女性の受講科目分野の相違の影響によるものだろう。例えば、言語科目と社会分野の科目とで予習・復習の必要性が異なるのは当然である。

| 学習状況 | | 男 | | 女 | | 計 | |
|-----------|--------|----|-------|----|-------|----|-------|
| 予習の有無 | 全科目予習 | 11 | 44.0% | 11 | 50.0% | 22 | 46.8% |
| | 一部科目予習 | 1 | 4.0% | 5 | 22.7% | 6 | 12.8% |
| | 予習なし | 13 | 52.0% | 6 | 27.3% | 19 | 40.4% |
| 復習の有無 | 全科目復習 | 14 | 56.0% | 13 | 59.1% | 27 | 57.4% |
| | 一部科目復習 | 1 | 4.0% | 3 | 13.6% | 4 | 8.5% |
| | 復習なし | 10 | 40.0% | 6 | 27.3% | 16 | 34.0% |
| 関連学習の有無 | 全科目学習 | 20 | 80.0% | 14 | 63.6% | 34 | 72.3% |
| | 一部科目学習 | 4 | 16.0% | 4 | 18.2% | 8 | 17.0% |
| | なし | 1 | 4.0% | 4 | 18.2% | 5 | 10.6% |
| 他機関でも同一科目 | 受講 | 4 | 16.0% | 5 | 22.7% | 9 | 19.1% |
| | していない | 21 | 84.0% | 17 | 77.3% | 38 | 80.9% |

3 科目分野別にみた受講者層の特徴

したがって、学習状況に関しては科目ごとにその特徴を見ておく必要がある。そのために、作成したのが表14で、市民聴講生が受講している35科目についてその性別・年代別受講者数、科目選択理由、学習状況を示したものである。科目は、おおまかに言語分野、社会分野、文化分野に区分し、それぞれの小計を記して分野間の相違を比較できるようにした。科目数を比較すると言語13、社会14、文化8であるが、それぞれの受講者数は22(31%)、27(36%)、24(33%)とほぼ等しくなる。ただし、ここで受講者数というのは実受講者数ではなく、科目別受講者を合算したものであり、複数科目受講者は複数回カウントされている(以下、実受講者数と区別する必要がある場合には科目受講者数と記す)。

表14 科目別受講者数、選択理由、学習状況

| 分野 | 科目 | 曜日 時限 | 性別・年代区別受講者数 | | | | | | 計 | 選択理由 | | | | | 学習状況 | | | |
|---------------|-------------------|----------|-------------|-----------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| | | | 男性 | | | 女性 | | | | テーマ | 難易度 | 講師 | 時間 | 継続性 | 予習 | 復習 | 関連学習 | 他大学 |
| | | | MY | ME | MU | FY | FE | FU | | | | | | | | | | |
| 言語 | 初級現代ウイグル語 | 火3 | | | 1 | 1 | | 1 | 3 | 3 | | 1 | | | 3 | 3 | 3 | 1 |
| | カタルーニャ語 | 火2 | | | | 1 | | | 1 | 1 | 1 | | 1 | | 1 | 1 | | |
| | グルジア語 | 木3 | | | | 1 | | | 1 | 1 | | | | | 1 | 1 | 1 | |
| | 現代ギリシャ語 | 月4 | | | | 1 | | | 1 | 1 | | | | | 1 | 1 | 1 | |
| | 現代ヘブライ語 | 金3 | | 1 | | | | | 1 | 1 | | | 1 | | 1 | 1 | | |
| | ポーランド語 | 月2 | | | | 1 | | | 1 | 1 | | | | | 1 | 1 | 1 | |
| | ラテン語基礎 | 金1 | | | | 1 | 1 | | 2 | 2 | | 1 | 1 | | 1 | 1 | 2 | |
| | ルーマニア語 | 木2 | | | | 1 | 1 | | 2 | 2 | | 2 | 1 | 2 | 2 | 1 | 2 | 2 |
| | 英語音声学・音韻論概説2 | 金3 | | | | 1 | | | 1 | 1 | | | 1 | | | | | |
| | 通訳論 | 金2 | | | | 1 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | | 1 | 1 | 1 | |
| | 日英語対照 | 火4 | | | | 1 | 2 | | 3 | 3 | | | 1 | 1 | 2 | 2 | 2 | 1 |
| | わかる英文法 | 木3 | 2 | | | | 2 | | 4 | 3 | | 2 | 1 | 2 | 3 | 3 | 4 | 1 |
| | 言語学の初歩(2) | 金3 | 1 | | | | | | 1 | 1 | | | | | 1 | | | |
| 言語科目小計 | | | 3 | 1 | 1 | 10 | 6 | 1 | 22 | 21 | 2 | 6 | 8 | 6 | 18 | 16 | 17 | 5 |
| 百分比 | | | 14% | 5% | 5% | 45% | 27% | 5% | 100% | 95% | 9% | 27% | 36% | 27% | 82% | 73% | 77% | 23% |
| 社会 | アジア史近代東アジア国際関係史II | 火2 | 3 | | | | 1 | | 4 | 4 | | 2 | 3 | 2 | 2 | 1 | 3 | 1 |
| | アメリカ自由の制度空間 | 火3 | | 2 | | | | 2 | 4 | 4 | | 3 | 2 | | | 1 | 4 | 1 |
| | アメリカと中東地域国際関係システム | 木2 | | 1 | | | | | 1 | 1 | | | 1 | | | | 1 | |
| | インドシナにおけるベトナム近現代史 | 木4 | 1 | | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 | | | | | |
| | 現代社会と宗教 | 水3 | | 1 | | 2 | | | 3 | 3 | | | 2 | 1 | | 2 | 2 | 1 |
| | 国際報道で読み解く紛争と平和 | 水2 | 1 | | | 1 | 2 | | 4 | 4 | | 2 | 1 | 2 | | 2 | 4 | |
| | スポーツ経営学 | 火2 | 1 | | | | | | 1 | 1 | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| | 政治学入門 | 火1 | 1 | | | | | | 1 | 1 | | | | | 1 | | 1 | |
| | 戦後ドイツ・ヨーロッパ史 | 月3 | | | | 1 | | 1 | 2 | 2 | | 1 | 1 | 2 | 1 | | 1 | |
| | 多言語多文化社会論入門II | 火4 | | | | | | | 2 | 2 | 1 | 1 | 2 | 2 | 1 | | 1 | |
| | 地域研究 | | | 1 | | | | | 1 | 1 | | 1 | 1 | | 1 | | 1 | |
| | 法学 | 火5 | | | | 1 | | | 1 | 1 | | | | | 1 | 1 | 1 | |
| | 南アジア研究入門 | 金3 | | 1 | | | | | 1 | 1 | | | 1 | | | | | |
| 豊かな社会以前のイギリス | 木4 | | | | | 1 | | 1 | 1 | | | 1 | | | | | | |
| 社会科目小計 | | | 7 | 8 | 0 | 5 | 6 | 1 | 27 | 27 | 1 | 11 | 16 | 10 | 8 | 8 | 20 | 3 |
| 百分比 | | | 26% | 30% | 0% | 19% | 22% | 4% | 100% | 100% | 4% | 41% | 59% | 37% | 30% | 30% | 74% | 11% |
| 文化 | ドイツ語圏の文化 2 | 水2 | | | | 1 | | | 1 | 1 | | 1 | | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| | 生涯学習論II | 火1 | | 2 | | | 2 | | 4 | 4 | | | | 1 | 2 | 3 | 2 | |
| | 哲学を学び始める人のために II | 金2 | 1 | | | 1 | | | 2 | 2 | | | 1 | | | 1 | 2 | |
| | 東南アジア古典文化論II | 木4 | | | | | 2 | | 2 | 2 | 1 | | 1 | 2 | 1 | 1 | 2 | |
| | 日本の古文書を読み解く | 木3 | 1 | 4 | | 1 | 2 | | 8 | 6 | | 4 | 1 | 4 | 7 | 7 | 6 | 2 |
| | 表象としての映画 | 木2 | 2 | 1 | | | 2 | | 5 | 5 | | | 4 | 1 | | 1 | 3 | |
| | 文化を読み解くために | 月5 | | | | | 1 | | 1 | 1 | | | | 1 | | | | |
| | ロシア文学概論 | 金4 | | | 1 | | | | 1 | 1 | | | | | | | | 1 |
| 文化科目小計 | | | 4 | 8 | 0 | 3 | 9 | 0 | 24 | 22 | 1 | 5 | 7 | 10 | 11 | 14 | 17 | 2 |
| 百分比 | | | 17% | 33% | 0% | 13% | 38% | 0% | 100% | 92% | 4% | 21% | 29% | 42% | 46% | 58% | 71% | 8% |
| 合計 | | | 14 | 17 | 1 | 18 | 21 | 2 | 73 | 70 | 4 | 22 | 31 | 26 | 37 | 38 | 54 | 10 |
| 百分比 | | | 19% | 23% | 1% | 25% | 29% | 3% | 100% | 96% | 5% | 30% | 42% | 36% | 51% | 52% | 74% | 14% |

注: MY=男性60~69歳、ME=男性70歳以上、FY=女性40歳~59歳、FE=女性60歳以上、MU、FUは男女年齢無回答

(1)分野別の受講者数 表14の受講者の合計欄を見ればわかるように、科目受講者数はFE>FY>ME>MYとなる。つまり、女性のほうが多数であり、かつ男女ともにより高齢の層が多数であることがわかる。実受講者数はME>FY>FE>MYであったが、FEの受講科目数が多いので、MEとFEの順位が逆転しているのである。

(2)分野別受講者の性別、年代別構成 受講者の属性を科目分野ごとに見てみると、以下の特徴があることがわかる。

言語分野ではFY(45%)>FE(27%)>MY(14%)>ME(5%)となり、受講者の圧倒的多数が女性であり、かつ男女ともより若い層が多数である。

社会分野ではME(30%)>MY(26%)>FE(22%)>FY(19%)であり、男性の受講者がやや多く、かつ男女ともより高齢の層が若干多くなっている。

文化分野ではFE(38%)>ME(33%)>MY(17%)>FY(13%)となり、男女の差はほとんどないが、男女ともより高齢の層の比率がかなり高い。

以上の特徴は、Ⅲの1でみた性別・年代別の受講科目分野の分析結果と合致している。

4 科目分野別の学習状況

表14の学習状況の項からわかるように、全体では5割強の受講者が予習、復習をしている。関連した学習をしているのは74%もあり、聴講をきっかけに広く熱心に学習する姿が想像できる。他の大学等で同じテーマを学習している人も14%いる。

科目分野別にみると、関連学習では分野別の相違がほとんどないのに対し、復習・予習に関しては言語>文化>社会の順でかなりの差があることがわかる。このことから、男性受講者の予習・復習率が低かったのは、実は受講科目分野の相違の結果であったことが確認できる。

予習と復習を行う受講者の比率の高低は、分野ごとにほぼ対応しているが、詳しく見ると言語分野では予習が、文化分野では復習が、若干高くなっている。また社会分野では予習・復習の比率は偶々同数であるが、予習だけの科目と復習だけの科目がかなり目立つ。これらも興味深い事実である。

5 科目の選択理由

表14の選択理由の項目をみると、市民聴講生が受講科目を選択した理由は、テーマ(96%)>時間(42%)>継続性(36%)>講師(30%)>難易度(5%)の順となっている。何よりもまず科目のテーマへの興味関心が優先し、それに対して難易度はほとんど考慮にされていないことがわかる。分野別にみると、言語分野ではテーマ以外の要因が比較的低いのに対し、社会分野では時間と講師が、文化分野では継続性がかなり考慮されていることがわかる。

6 科目選択の組み合わせパターン

表15 聴講科目選択の組み合わせ

表15は47名の受講者が言語、社会、文化の各分野の科目をどのように組み合わせ受講しているかを示したものである。

| 履修科目数計 | 1分野のみの履修 | | | 複数分野の履修 | | | | | 計 |
|--------|----------|----|----|---------|-----|-----|------|------|----|
| | 言語 | 社会 | 文化 | 言+社 | 言+文 | 社+文 | 言2+社 | 文2+社 | |
| 1科目 | 8 | 11 | 9 | | | | | | 28 |
| 2科目 | 1 | 4 | 1 | 2 | 2 | 2 | | | 12 |
| 3科目 | 2 | | 1 | | | | 1 | | 7 |
| 計 | 11 | 15 | 11 | 2 | 2 | 2 | 1 | 3 | 47 |

1分野のみ受講者が37名で全体の8割近くになる。とはいえ、大部分は1科目のみ受講者なので、市民聴講生に同一分野科目を受講する傾向が強いことを意味するわけではない。

複数科目受講者の選択科目分野を見てみると、2科目受講者の場合は、2科目とも同一分野が6名、異なる分野の組み合わせが6名と、同数である。3科目受講者になると、同一分野のみが3名、複数分野が4名と、むしろ後者が多くなっている。事例が少数なので確言はできないが、複数科目を受講する場合に、半分くらいの受講者は分野を超えた科目にチャレンジしているといえよう。

6 今後の学習の方向性

今後の学習の方向性に関する質問への回答からは、市民聴講生が聴講科目を色々選択しながら(何年かかけて)深く、広く学習したいという意欲をもつことがわかる。興味深いのは、広く学習したいに対する女性の肯定回答がやや少ないことで、これは女性の言語分野の受講比率が高く、同一言語の学習を深めたいという志向がより強いことを現しているだろう。

| | 男 | 女 | 計 |
|--------|----|----|----|
| 1はい | 21 | 19 | 40 |
| 2いいえ | 1 | 1 | 2 |
| 3わからない | 3 | 2 | 5 |
| 計 | 25 | 22 | 47 |

| | 男 | 女 | 計 |
|-------|----|----|----|
| はい | 20 | 15 | 35 |
| いいえ | 4 | 4 | 8 |
| わからない | 1 | 3 | 4 |
| 計 | 25 | 22 | 47 |

7 学習成果の社会的活用

学習成果の社会的活用ということは生涯学習の大きな課題であるが、この質問への回答では、男女差がかなりはっきりと出た。女性は現役世代を含み、平均年齢が若いことで社会活動への意欲をもっている(77.3%)。それに対して男性は社会的に活躍した上でのリタイヤ世代であり、いまさらと感じているのかもしれない。にもかかわらず半数近い男性が社会活動に生かしたいと考えている点に注目すべきであろう。このような社会参加意欲にどう対応するかは、今後の大きな課題である。

| | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
|-------|----|----|----|-------|-------|-------|
| はい | 11 | 17 | 28 | 44.0% | 77.3% | 59.6% |
| いいえ | 9 | 2 | 11 | 36.0% | 9.1% | 23.4% |
| わからない | 5 | 3 | 8 | 20.0% | 13.6% | 17.0% |
| 計 | 25 | 22 | 47 | | | |

8 施設の利用

学内施設の利用についても質問してみた。

最も利用されているのは男女とも学食やカフェで、図書館も利用者が多い。蔵書の充実ということでは、大学の性格上内外の言語関連が多いのではないかと。一般雑誌、新聞など、ゆったりと読めるので、落ち着いた空間として利用されている。学食、カフェ同様、学生に接する大切な場にもなっている。視聴覚教育センターはあまり利用されていないが知らない人が多いのではないかと。その他として「理髪店」などがあつた。

| 施設名 | 男 | 女 | 計 |
|-------------|----|----|-----|
| 図書館 | 18 | 19 | 37 |
| 視聴覚教育センター | 2 | 3 | 5 |
| 情報処理センター | 0 | 1 | 1 |
| アゴラグローバルカフェ | 11 | 13 | 24 |
| 学食・生協 | 24 | 18 | 42 |
| その他 | 2 | 1 | 3 |
| 回答数計 | 57 | 55 | 112 |

9 期待・希望すること

受講可能科目数の拡大およびキャンパス内での人間関係のあり方について、市民聴講生の期待・希望を質問した。

1) 受講科目数 現在毎学期の聴講科目数は3科目以内とされている。それを増加する希望の有無は、男性 24%、女

| | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
|----|----|----|----|-------|-------|-------|
| あり | 6 | 12 | 18 | 24.0% | 54.5% | 38.3% |
| なし | 19 | 10 | 29 | 76.0% | 45.5% | 61.7% |
| 計 | 25 | 22 | 47 | | | |

性 55%と、男女の差が大きく出た。男性には 3 科目受講者はなく、現状でも特に問題を感じていないのに対し、複数科目受講者の多い女性の場合は過半数が聴講可能科目数拡大を望んでいる。ここにも、女性の学習意欲の強さが現れているといえよう。

2) 開放希望科目 科目選択の幅を広げるために、市民聴講生に開放される科目数を現在以上に増加することを男女とも 6 割が希望している。

開放希望科目として具体的に挙げられたものを以下にそのまま列挙する。スペイン語、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語、ロシア語、ポーランド語、朝鮮語、

古典ギリシャ語、サンスクリット語、チェコ語、スロヴェニア語、ウイグル語中級、マイナー言語入門講座、英会話・コミュニケーション、通訳論で経済通訳や同時通訳の科目、時事英語 (Financial Times を読む)、東欧とアフリカの歴史文化、歴史・外国事情、ジェンダー、日本語教育指導関連科目、アート系(美術や音楽)、国際法、ロシア史、フランス史、文学、哲学、歴史関連、ロシア・フランス・イタリア・スペインなどの地域関連講座、日本史関連講座、歴史を含む各地域事情、アラブ大変動を読む、英国史、歴史関係、言語、経済学、朝鮮、中国、ロシア、東南アジアの動向に関する講義。

3) 他の聴講生、学生や教職員との関わり 最も多いのは聴講生同士のコミュニケーションになっている。前掲「聴講の動機」の項で「仲間づくり」を選んだのが 1 人であったことから、一般的にコミュニケーション欲求は強くないともいえるが、それでもやはり聴講生相互の交流が希望されているのである。学生とのコミュニケーションを希望する男性が多いのは仕事や社会経験を伝えたいという思いの表れかもしれない。学生同様の指導・参加を希望している女性が多いのは「言語」を選択している人が多いことから、言語学習の特性によると考えられる。

その他として「始業時間を元に戻してほしい」などがあつた。

| | 男 | 女 | 計 |
|----|----|----|----|
| あり | 15 | 13 | 28 |
| なし | 10 | 9 | 19 |
| 計 | 25 | 22 | 47 |

| | 男 | 女 | 計 |
|-----------------|----|----|----|
| 学生とのコミュニケーション | 13 | 6 | 19 |
| 聴講生同士のコミュニケーション | 11 | 10 | 21 |
| 教員とのコミュニケーション | 8 | 8 | 16 |
| 学生と同じ指導、参加 | 5 | 8 | 13 |
| その他 | 3 | 2 | 5 |
| 回答者計 | 25 | 22 | 47 |

IV 聴講生の期待と要望

「退職後まとも心身が使える期間は10年だろうか15年だろうか。この間に学習できるのは幸いです。しかし自分のためだけの学習になってしまう気がする。このままとった期間を利用して学習した経験を何かに役立てたい。」(63歳男性、初聴講)

上記は外大市民聴講生の代表的な意見と言えるだろう。全員が学習できる喜びを感じ、多くの聴講生が学習成果を社会に還元したいと考えている。アンケート調査の自由記述部分を見ると、選択した科目に対する肯定的、否定的、そしてさらには自戒的意見があり、そこから聴講生の期待と要望も読み取れる。

1 聴講生による科目の評価

アンケート調査では選択科目に関して聴講生の感想を自由に記述してもらった。その結果を言語、社会、文化の三分野に分け、分野ごとに選択理由、肯定的評価、自戒的评价、否定的評価に整理して聴講生の「生の声」紹介し、簡単なコメントを加えた。

(1) 言語系科目

1) 選択理由

「友人から勧められた」、「在職中のアメリカ人との付き合いからヘブライ語を学習する気になった」、「他では学べない科目で、カルチャーセンターより高いレベル」、「学びたい言語があった」、「他では学べないから」、「特定講師に教わりたかった」、「ルーマニア語や『わかる英文法』の教授が素晴らしいから」、「語学に興味がある」、「更なる学びが可能」など。

2) 肯定的評価

「他の類似言語との比較が面白い」、「この1年で不明部分がかなり理解できた」、「先生は話題豊富で面白い」、「少しずつでもいろいろなことが学べる」、「この科目が来年度もあればぜひ受講したい」、「読書のみでは得られない知識が吸収できて感謝」、「難解な文法を大変わかりやすく教えてもらえるので感激」、「担当講師の授業は丁寧でわかりやすい」、「目から鱗体験と先生の人生観がわかる素晴らしい授業」、「日本最高の音声学講義を確信」、「先生の聴音力に感激」、「有意義な講座。語学に関心がある聴講生に勧めたい」、「正規学生と同待遇。進度速いが、体系付けられた授業」など。

3) 自戒的评价

「自分の基礎的な知識の欠如を実感して、文字に慣れるのが大変で、辞書もなく、不便だが、先生のオリジナルプリントテキストはとても良くできている」、「言語学的基礎知識に欠けるため、専門用語で苦労」、「現代はコミュニケーション重視の英語が主流だが、学生時代に英文法のような本質的な勉強をする必要がある」、「学生と同じレベルで受講するのはかなりハード」、「市民聴講生はでしゃばってはいけないが、何かひとつでも探求できるのが見つければそれで十分」など。

4) 否定的評価

「各国学生の意見、考え、体験をもっと聞きたい」、「日本語と英語の対照が不明確」、「日本語の難しさを痛感。内容はかなり高度」、「各時間のテーマを絞って欲しい」、「教科書を読むことがほとんどで、授業時間も短い、講義の実態がわかっていたら、受講しなかった」、「授業の進め方に不満有り、来年度別の講師で受講し直し」など。

5)コメント 外大で聴講可能な言語系科目は主として少数言語を対象としており、学習チャンスを外大で発見できたことで、真剣に学習に取り組んでいる。否定的評価は言語学習そのものに対してではなく、日本語文法や言語学に関する科目に集中している。

(2)社会系科目

1) 選択理由

「講義内容から」、「出身大学だから」、「興味ある講座が多い」、「科目に関心あるテーマが多い」、「聞きたい内容があった」、「西ヶ原時代の教授を知っていた」、「学生と同席して専門性が高い授業が受けられる」、「他大学の中高年向け生涯学習講座と違うから」など。

2)肯定的な評価

「テーマも内容も面白い」、「知的充実の一助として。著書への活用」、「インドの言語状況が理解できた」、「専門性高く、現代とのつながりも強固」、「現代の東アジア関係を理解する上で極めて有益」、「毎回克明な資料を先生が作成、配布して頂き、講義が理解しやすく、また興味がさらに深まり、関連学習の動機になっている」、「大変良い」、「素晴らしい講義」、「素人には入手困難な外交資料等を用いて掘り下げた説明が良い」、「戦争体験者として枢軸国ドイツの戦後の推移の詳細を知りえている。日独の戦後の動向を自分で体験している時代と整理して考えるのに役立つ」、「独特の語り口が面白い」、「タイトルからでは内容が把握できなかったが、現代アメリカを知る原点に触れ、得る所多し」、「来学期も継続を希望」、「ヨーロッパの歴史から説き起こし、アメリカの特異性に迫る講義の進め方はとても面白い」、「前期の戦争とメディアも良かった」、「統一テーマの下、多彩な講師のリレー形式の妙」、「学生に囲まれていると、各回の個別テーマに対する現代の若者の感応、反応の仕方や強弱、彼らの気質なども伝わってきて面白い」、「朝日新聞提供講座だけの価値あり、講師が充実している」、「面白い」、「講師の経験に基づく肉薄した話はインパクトがある」、「知らなかった常識を補える」、「過去に受講したすべての講義に満足」、「教師の能力が高く、満足」、「先生のドイツ語圏の文学と文化の講座中、生涯学習意欲の向上に資するお話を時々挿入された。市民講座受講生にとってはとても勇気付けられると仲間内で評判になった」、「学生と話す機会があるのは嬉しい」など。

3)自戒的評価

「ゼミ参加者少数のため、聴講生にも発言の機会があるが、準備不足で迷惑を掛けている」。

4)否定的評価

「一人の講師が2回講義を担当するが、時間が足りないので、理解したことにして進み、抽象的な説明で済ますことがある」、「講師により内容にばらつきあり、期待はずれも多いが、現地ルポの熱がある」、「グループワーク重視を標榜しながら皮相的な議論しかできていない。時間配分に工夫が必要」、「一度ですべてを済ませるために総花的で上滑りの感有り」、「以前受講した教師は時間にルーズで、プリント等も用意せず、まったく熱がなかった。別の社会系科目担当者はせっせと板書するだけ、アンケート調査をする割には結果が生かされていないと思う」など。

5)コメント 深刻な否定的評価もあるが、肯定的評価の分量が他を圧倒している。社会系科目聴講生は講義の内容に大満足していると推察できる。

(3)文化系科目

1)選択理由

「レベルが高い。学生との共学に郷愁を感じる」、「科目で選択」、「興味ある講座があった」など。

2)肯定的評価

「時代背景を踏まえながら文化を見て行く点が面白い」、「ロシア文学通史が面白く聞いた。古典作家の作品が読めて楽しかった」、「教授の日本の伝統文化と古文書解読を4年連続で受講。教材が毎年新しくその熱意に感心。教授のフィールドワークで集めた資料ばかりで、内容も興味ある物が多い」、「実証や裏づけ資料も豊富に配布され、非常に説得力がある」、「古文書解読はパズルのようで、爽快」、「日本の昔の生活習慣などの知識が増える」、「単なる解読だけでなく、歴史的な背景説明もあって面白い」、「古文書解読は後期のみ。前期でもやってほしい。先生が忙しければ他の先生でもかまわない」、「大学でこんなに面白いことをやって良いのだろうかという驚きあり。大量に海外に流れた日本の書画を外国人オーナーに読んで欲しいと頼まれ、従来読めなかったものが読めるかもしれないという大きな期待有り」、「充実した内容。教師の学識と授業準備に敬服」、「毎回とても楽しい時間」、「毎年内容が変わるので続けて聴講中」、「講師により差があるが、映画の一方向、あるいは多方向への新たな見解有り」、「通常では見られない映画の上映は楽しい」、「発表や質疑応答の総合機会があり、有意義」、「充実した内容で、学び甲斐がある」、「50 数年ぶりの大学の講義が実に楽しい」、「図書館を自由に利用できるため、聴講科目以外の関心事を勉強できて、ありがたい」。

3)自戒的評価

「初心者と経験者が混在する講義で、進め方が大変だろう。本人は違和感なく聴講。経験者が初心者の方になれたら良い」、「講義内容は簡単には理解できないが、考え、悩むことに意義があるらしい」、「議論の機会多く、考えさせられる」、「生涯学習の本来の意義を知りたいが、目標になかなか到達しない」、「退職後まともに心身が使える期間は10年か15年だろうか。この間に学習できるのは幸い。学習を役立てたい。現役時代からテーマを定めて継続しなかったことを猛反省」。

4)否定的評価

「あまり新鮮さを感じない」、「授業で紹介された新しい文学作品が図書館にないのは残念」、「歴史的な映画も希望。音楽などの文化や風習などのグローバルなルーツと流れも紹介してほしい」、「各国の生活文化の紹介とその国の留学生の意見を聞きたい」。

5)コメント 文化系科目でも肯定的評価が他を圧倒している。否定的評価は「新鮮さを感じない」という評価以外は今後への期待と考えられよう。

2 その他の評価

三分野に共通するのは、講義や授業の内容に関する批判も皆無ではないが、外大の聴講科目に対する肯定的評価が圧倒的に多い点である。しかし次のような明確な不満もある。教官と学生に対する不満の声が聞かれた。

- *「授業の後半、終わる直前に出席する学生がいてもとがめない教師もいる。」
- *「学生が定時に講義に集まらないので困る。」
- *「多くの講義を過去に体験。講義内容が10年一日の感有り。」
- *「リレー講義は講師間の連携が悪く、突然休講などがあった。」

3 聴講科目に対する総合評価(聴講生の満足度測定)

以上のような市民聴講生の自由記述を、肯定的意見を1点、否定的意見をマイナス1点、記述がないもの、あ

るいは肯定否定が入り混じった意見を 0 点として採点し、満足度を測ってみた。言語系科目では 22 人で合計 5 点を計上し、23%の満足度、社会系科目は 27 人で 18 点、67%の満足度、文化系科目では 24 人で 17 点を計上して 71%の満足度となる。

他の二分野に比べて言語系科目に対する評価が極端に低い点は注目に値する。前に見たように、純粋に言語の習得を目的とする学科の他に言語学、通訳論、日本語文法に関する科目があり、これに対する否定的評価が全体の評価を引き下げていると思われる。

4 大学当局への要望

「外大の市民聴講生制度は首都圏国立大学の中では画期的な制度。ますますの発展と拡充を希望。正規学生と同じ扱いをしてもらえらるなら、講義の受講料を値上げすることになっても止むを得ないと考える」、「市民に学者の労作を味合わせてくれる制度は素晴らしい」、「図書館の利用は有難い」などの肯定的な声もあるが、市民聴講生制度への参加者数増大を望むなら、以下の要望は無視できないだろう。

＊「前期同様、後期の通知を早めに送付して欲しい。」

＊「講義開催曜日と時間を年ごとに変更すれば、より多くの受講が可能になる。」

＊「1 時限目の開始時間を元に戻して欲しい。」

＊「3 科目で十分だが、定員に達し、聴講不可となる場合があるので、予備の聴講希望を出させて欲しい。」

特に最後の要望は、3 科目枠いっぱいを利用して外大の聴講生生活を満喫したいと考えている人たちにとっては真剣な問題である。大学当局にはお手数だろうが、ぜひとも正規枠からはみ出す聴講生に限っては予備聴講科目を考えて頂きたい。

5 市民聴講制度とアカデミー講座

東京外国語大学が一般市民を対象に大学を一般市民に開放するオープンアカデミー制度には三つのプログラムがある。一つは大学が自ら外に出て行う文化活動、もう一つは外国語の授業を主として夜間に本郷と府中のキャンパスで行うアカデミー講座、最後の一つは今回のアンケート調査の対象となった府中キャンパスだけで行う市民聴講生制度である。

アンケートの自由記述に「アカデミー講座の対象言語を市民講座科目に加えて欲しい。具体的には仏、伊、独、露、ポーランド語などを昼間、外人教師で。受講料は今より高くなっても構わない。外大の市民講座にこれらの講座が欠けているのは不可解」との意見があった。

2011 年後期の市民聴講制度では 19 ヶ国語が学習できるが、その大部分が少数言語であり、ポピュラーな言語科目は日本語学と日本語文法を除けばない。外大の本郷並びに府中キャンパスで主として 19 時から 90 分間行われるアカデミー講座では、学歴や経験を問われずに 25 ヶ国語の外国語の初中級の学習に参加できる。しかし府中のアカデミー講座のいくつかのクラスで受けた印象は、夜間のアカデミー講座受講生は昼間の市民聴講制度を知らない人が圧倒的に多いか、知っていても全く関心がないかであり、反対に市民聴講生の中にはアカデミー講座を知らない人が多かった。

市民聴講生には外大でしか学習できない言語の習得機会を求めると一般教養科目を目指す人とに二分されることはすでに指摘したが、少数言語のみならず、ポピュラーな外国語でも学習機会を市民聴講生に提供できれば、東京外国語大学のオープンアカデミー制度の利用者はさらに大幅に増えるだろう。

V 調査から見えてくるもの

1

なぜ、東外大の市民聴講生であるのか —学ぶことの意味の再認識—

小嶋光恵

1 はじめに

今回のアンケート調査は改めて東京外国語大学の市民聴講生受入制度やその内容について一考させて頂ける好機会でした。ここでの一大特性は、正規学生と一緒に同じ講義を受けられること、自分の大学生時代と異なり、単位取得に終始せず、本題を学べること、そして好奇心を満足させながら一時期「学生気分」を味わえることにあります。市民聴講生の立場から、現段階の視点を的確にポジショニングし、さらなる展開へと方向付けて頂ける良き仲間や先生に恵まれたことに感謝しています。

2 私にとっての有意義な2年

過去には他大学でもオープンアカデミーに参加し、興味のある講義をいくつか受講してきました。しかしこの大学のように系統立ったプログラムでなく、満足感に乏しいものでした。私の学びの中心には「ヨーロッパの歴史と文化」への興味があり、美術、音楽など芸術への憧憬がベースとなっています。東外大の文化系の講義は質も高く有意義です。さらに学ぶ意味を漠然と捉え、「知識教養の充足」から「生涯学習論」の講義を受講することにより、残り少ない人生の意義ある過ごし方についても一考させられています。

3 受講科目内訳からの考察と事象

聴講生の傾向を今回のアンケート結果にみると、居住地域は府中市、調布市を中心に近隣市民が多勢を占め、同じ近隣でも三鷹市や小金井市などからの参加者は極少です。しかし遠隔地からの受講者も少なからず見受けられます。これらの点についてはさらなる調査が必要でしょう。

また、受講者年齢で特徴的なのは男女差があったことです。

男性は60代、70代に集中。当然のことながら現役時代には聴講制度には参加できず、リタイア後の方向性のひとつとしての選択と考えられます。一方、女性の場合は40代から聴講制度に参加し、70代まで広い年齢域です。40代女性の受講者は多く、彼女たちの選択講座が言語系である事実から判断しても、主婦、シングルを問わず、将来(近未来)への願望と計画が推察されます。専業主婦からの脱皮あるいは現在の職業の維持継続の可能性が考えられそうです。50代から70代の女性の場合、直接的目的と言うより、教養への意義、知識の拡充ともいべき自己開発に方向性が見出されます。

4 受講科目からわかること

聴講項目から分類すると、「言語系」、「社会系」、「文化系」の3分野に集約できます。語学については、上述のように40代女性のウエイトが高く、まだまだ将来への扉が開ける年齢であり、世界が開けるグローバル社会の象徴的事象とも言えるでしょう。語学分野の授業を選択している40代以外の年齢層では、性別や年齢に特別の格差はなく、これまでの人生経緯や研究目的に準じているように思われます。ほかにも社会性に富み、グローバル意識が高く、過去にも今後にも外国との交流機会がある、あるいはそれへの関心や興味が高い層と言えましょう。

「社会系」については、専門知識へのより深い「学び」と「新しい発見」、未知の世界あるいはより充足できる感覚への期待も考慮できます。とくにこの分野では男性が目立っているのは、特有の論理性あるいは過去の社会的地位へのノスタルジーがあるからでしょうか。

「文化系」については、知識の充足と教養への願望が特徴的です。新しい世界への気楽な旅であり、趣味領域のより高度な補給とも考えられます。学ぶ領域は広く、更なる、聴講項目の補充があれば幸いです。

5 結論

市民聴講生であることの意味は、年代、性別によりかなり異なるように思われます。男性と60代以降の女性においてはリタイア後の生活意義と時間の利用傾向が認められます。高齢化社会において、学ぶ楽しさ、人生における充足機会、人間としての「生」の意義性を補足できるのは有意義と言えましょう。市民聴講生制度には学内施設の利用、持て余す時間の有効利用、コミュニケーションの機会などなど利点が多いので、より多くの人々に参加を促すためにも、大卒者だけしか東京外国語大学の市民聴講生にはなれないという学歴枠への誤解を解くことが望まれます。また、聴講生同士の交流と切磋琢磨ができるサロンの開設が望まれます。

2

生涯学習の場としての大学、聴講生

－アンケート調査の結果から－

土田晶子

(1) 高い回収率

生涯学習は色々な年齢の人が、色々な場で、色々な形態・内容で行なっている。そのなかで大学の聴講を選択し、大学に通学している人がいる。東京外大に通う聴講生、私自身の仲間である聴講生について、どのような人々なのか、どこからどのような目的で通学しているのか、何をどのように学習しているのか、いわば東外大の聴講生像を探ってみたいと思ったのがアンケート調査の始まりだった。

このアンケート調査は11月に企画され、12月6日から16日の間に用紙が配布され23日に回収された。色々な事情で聴講生全員に配布することができず、12月の寒い日の授業に出席している聴講生に、それも全科目をカバーすることができずに実施された。配布数に対する回収率が高いのはひとつには、聴講生の中でも熱心に取り組んでいる人に調査票が渡ったこと、またこの種の聴講生の意見を述べる機会がこれまでなかったことに起因していると考えられる。配布していて感じたのは欠席者が意外に多いということであった。

(2) 東外大の聴講生像

調査データをまとめるうちに色々なことが見えてきて、自分なりに聴講生像が形作られた。大きく分けて三つのタイプがある。

まずは女性の40～50歳代の現役タイプ。学習状況の分析ではFYに区分されている。このタイプの特徴は語学選択者が多く、遠距離通学をものともせずに通学し、予習復習も怠りない。学んでいるのは言語のなかでも少数言語ばかりだが、社会のどこかで役立てたいと思いながら楽しく学習している。外大でしか学習機会がない科目中心で、それ以外の科目はあまりとっていない。専業主婦かパートタイマーか。

2番目のタイプは60歳以上の女性で、FEに区分されている。仕事や子育てをひとまず終えて、自由な時間を

何に使おうかと考えた末に聴講に通う。自分の興味・関心に沿って科目を選択し、好奇心旺盛で積極的な姿勢。できたら学習したことを社会に生かしたいと思っている。

3番目のタイプは全男性なので区分のMYとMEが合体している。定年後の人生を有意義に過ごしたい。長い仕事経験、人生経験から学んだことを元に世界や社会を見直してみたいと考えている。このなかを年齢よりも行動によって二分すると、活動的なグループはこれまでできなかった活動をしながら平行して聴講に通い、あまり活動的でないグループは聴講を継続することを中心に元気で自立的な生活を営んでいる。

どのタイプにも共通しているのは主体的な学習者であること。知的好奇心旺盛で大部分の人が科目に関連してなにかしら学習をしている。今すぐに役立つような実用性のほとんどない、教養の向上に向かって努力している。大学は学問の場であり、研究は真理の探究である。学生と違って何の強制力もないなかで進んで学ぶには、相当に強い関心や目的意識がなければ続かないであろう。

(3) 質問の不足を考える

まず、聴講科目数について。データを見ると、一人で選択できるのは3科目までと決められているが、その枠を十分使っている人は7人、全体の15%以下にすぎない。1科目が28人で約60%、2科目が12人で26%と出た。元々週に1回通学することを考える人がいる一方、結果的に1科目または2科目になったケースもあるのではないかと。自分の経験からも試験後に辞退するケース、1クラスの定員5人の枠からはみ出て聴講できないケースが考えられる。この申請時の聴講科目数と実際の聴講科目数のあいだの不一致については、今回の調査から落ちていた項目である。これを調べることで、試験の意義が確認できたり、定員の意味を見直すことができるかもしれない。

つぎに関連して「聴講科目数を増やしてほしい」が、意外にも4割以下(38.3%)だったのは、前述のように現在の3科目でさえとっているのが15%以下なのを考えると、当然の結果と思う。これは、大学の聴講をほかの社会活動や余暇活動との関係や、体力や費用を含めた個人的な事情のなかで考えていることの現われではないか。これを実証するには、仕事を含めた社会活動や趣味を含めた余暇活動を問わなければならなかった。その質問を通して、聴講の位置づけや他の活動との関係性が明らかになったのではないかと考える。当然、聴講生のなかには聴講に重点を置いて、多数の科目を聴講したい人もいるわけで、科目数に制限を加えることの意味はあまりないようにも思う。

3番目に留学生に関するところで、東外大の特色のひとつは大勢の留学生が学んでいることである。聴講科目の特徴としては「国際」や外国名を冠したものが多い。これを考え合わせると聴講生の留学生に対する関心は高いのではないかと想像される。その意味で「コミュニケーション」の項に留学生とのコミュニケーションを入れるべきであったと思う。

(4) 大学聴講の今後に向けて

ともあれ、東京外大の聴講生制度は概ね良く機能し、聴講生に大いに歓迎され、よく活用されている。大学近隣の人が聴講開放科目のなかから自分の興味関心にあった科目を選んでいるのに対し、遠距離通学をしている人は外大でなければ学習できない科目のために通学している。全国の大学の状況はどのようなものであろうか。そもそも聴講の制度があるのかどうか、地元で大学のある人は関心を持っているのかどうか。

今後社会の高齢化がいつそう進行するなかで、高齢者の高学歴化も進むこととなる。そのとき生涯学習の場として、大学は大いに期待されるのではないだろうか。しかし現時点で大学の聴講はあまり認知されていないように思う。今回の調査では府中市、調布市在住の聴講生が突出して多いことがわかった。これは両市が2006年にそれぞれ東外大と相互友好協定を結んだことの結果であり、自治体と大学との連携の有効性を示すものである。全国

的にまたは東京都で自治体はこのようなことをどう考えているのか、どう実行されているのか。興味のあるテーマである。

3

「生涯学習」Lifelong Learning とはなにか

小笠原道夫

それは「各人が自発的意志に基づいて、必要に応じ自己に適した手段、方法で自ら選んで、生涯を通じて行う」学習である。

「ゆりかごから墓場まで」にわたる生涯学習は 21 世紀にむけての教育国際委員会によって推奨された学習の 4 本の柱を再確認する知識を学ぶ。

- 1) 知識を学ぶ
- 2) なすことを学ぶ
- 3) なることを学ぶ
- 4) とともに生きることを学ぶ

そのキャッチフレーズが、誰でも(排除される人がいない)、どこでも、いつでも、なんで、も学べることである。

生涯学習という概念に含まれる問題点として。生涯とは、特に高齢化社会における「第 3 の人生期 J」という個人的、社会的課題として、自分の固有な人生への熱望増大な傾向になりすべての人の生涯がそうなるのではなし、かと思う。しかし、その多様性は性別、能力差、民族、貧富等により異なり社会変化の加速化重層化の下での設計は確実ではない。

4

調査を終えて

始めたら、やめられない東外大の聴講生 生涯学習の場としての東京外国語大学

坂本明美

私は 2008 年 4 月以来、火曜日の 19 時に始まる外大のオープンアカデミーのアカデミー講座イタリア語教室に通っています。昼間も勉強できる市民聴講生制度があることは早くから知っていましたが、現役業務が完全に終了した 2009 年前期まで参加できませんでした。退職後は長期間アメリカに行く予定で準備の一環として外大の『20 世紀アメリカ史』を聴講しました。現在は夜のイタリア語教室と昼間の市民聴講生科目 2 科目の授業を受けています。申し込時には 3 科目しか聴講できないと知り、いささかの不満を覚えましたが、今となっては 2 科目以上欲張らなかつたのは幸いでした。イタリア語と『生涯学習論』と『日本の古文書を読み解く』だけで私の予復習能力は総動員されており、自由になる時間は東京外国語大学通学で十二分に満たされているからです。

大旅行を終え、大いなる期待を抱いて 2011 年後期から新たに市民聴講生になり、高齢者がかなりいるのに気づき、皆さんが何を求めて外大にいるのかに興味を持ちました。『生涯学習論』クラスで実施したアンケート調査に参加し、知りたかったことが三つ、明らかになりました。

一つは一度聴講を始めたらずっと通い続けること、どうやらこれが生甲斐につながっているらしいこと、二つ目はなんらかのコミュニケーションを求める人が多かったこと、三つ目は語学が売りの外大でありながら、語学への関

心が市民聴講生ではあまり高くなかったことでした。

制度発足当時からずっと聴講している人もおり、ほとんどの聴講生が一度外大の聴講生になったら外大から姿を消すまで間断なく聴講しています。二つ目に関しては不思議の感を禁じえません。失うものは命以外には何もないはずの高齢者たちが、人との接触を極度に恐れている印象を受けたからです。教室で出会っても会釈もしないし、話もしない人が多いのです。推察するに、皆さん忙し過ぎるのです。予定表にはいっぱい行事が書き込まれており、大学では授業に参加するだけの余裕しかないのです。せめて外大に来る日は他のスケジュールは入れず、ぼんやりと校内で過ごす時間を確保しておけば、聴講生同士はもちろんのこと、学生とも教官ともコミュニケーションはきっと可能です。もっともぼんやり過ごすには冬の外大の校庭では寒風吹きすさび、屋内はおしゃべりを遠慮しなければならない場所ばかりです。

アンケート調査では語学科目を選んだ人たちの学習目的に着目しました。最終目標は社会還元したいという以外は不明でした。40歳を過ぎてからでは、かなり勉強しても翻訳家や通訳として身を立てるのは難しく、片言で国際交流に寄与できる程度でしょう。それでも立派です。しかし外国語学習の日本の最高峰の一つである東外大で聴講生やアカデミー講座の生徒として勉強するだけでは外国語は物にできないことを大学当局は参加者に伝え、相応の覚悟と犠牲を要求するべきでしょう。外大の学生たちには4年間の在籍中に英語以外の言語を物にできる人が確かにいるそうです。しかし彼らは聴講生とは比べ物にならないほどの時間を掛けています。私が調べたイタリア語の場合では、1年生と2年生で500時間の必須の授業に参加し、学部3年の夏にイタリアに留学して語学学校でさらに100時間、予習や復習の時間を除いて合計600時間の授業を受けています。それでもまだほとんど喋れないそうです。週一回、90分程度の聴講でイタリア語をマスターするというのはいないものねだりでしょう。

外国語を物にできるかどうかは別として、一般科目の聴講を許されて、学者たちの研究成果を聞き、好奇心を満足させられるのは有難い制度であり、この大学に通っている間は元気で長生きできると考えれば、東京外国語大学は素晴らしい生涯学習の場であり、同年輩の友人知人にも勧めたくります。

2011 年度後期 東京外国語大学

市民聴講生アンケート調査のお願い

私たちは「生涯学習論Ⅱ」を受講している市民聴講生のグループです。

このたび「生涯学習論」学習の一環として、今年度後期市民聴講生の皆さまを対象に、皆さんが市民聴講生制度をどのように利用し、ご自身の生涯学習に役立ててみえるかを調査することになりました。

この調査で得た情報は、あくまでも私たちの学習・研究の目的にのみ使用するものです。成果を公表する予定は、今のところありませんが、その場合には個人情報、プライバシーの保護には充分配慮いたします。

ご多忙中まことに恐れ入りますが、ご協力をお願い申し上げます。

**回答は 12 月 23 日（金）までにアゴラグローバル 2 階 市民聴講窓口
ボックスにご投函ください。**

「生涯学習論」聴講生研究グループ
代表責任者 「生涯学習論」担当教員 谷 和明
連絡先 TEL042-330-5773
Mail sk-tami@tufs.ac.jp

以下の Q1～Q19 の各質問について、選択肢を○で囲むか、ご記入をお願いします

聴講の動機・科目の選択について。

Q1：市民聴講生プログラムを何によって知りましたか。
1 インターネット 2 市報など 3 クチコミ 4 その他 ()

Q2：聴講の動機・目的についてお伺いします。

1 専門知識技能の獲得 2 教養の向上 3 余暇の活用 4 仲間作り
5 その他 ()

Q3：外大の聴講を選んだ理由をお伺いします。

1 学生生活の経験 2 大学施設の利用 3 家から近い 4 受講料が適正
5 その他 ()

Q4：聴講科目をお伺いします。

科目 1 ()

科目 2 ()

科目 3 ()

Q5：上記の科目について選択の理由・目的をお伺いします。該当欄に○をお付けください。
い。(複数回答可)

| | 科目1 | 科目2 | 科目3 |
|------------------|-----|-----|-----|
| 1 テーマへの興味関心 | | | |
| 2 難易度を考慮して | | | |
| 3 講師を考慮して | | | |
| 4 時間帯の便しさ | | | |
| 5 これまでの受講科目との継続性 | | | |

学習への取り組み組みについて (上記の科目別に答えてください)

Q6：予習をしていますか。

科目 1 (1 はい 2 いいえ) 科目 2 (1 はい 2 いいえ) 科目 3 (1 はい 2 いいえ)

Q7：復習をしていますか。

科目 1 (1 はい 2 いいえ) 科目 2 (1 はい 2 いいえ) 科目 3 (1 はい 2 いいえ)

Q8：関連・発展の学習をしていますか。(本を読むなど)

科目 1 (1 はい 2 いいえ) 科目 2 (1 はい 2 いいえ) 科目 3 (1 はい 2 いいえ)

科目 2…

Q9：同じテーマを他の大学などで学習していますか。
科目 1 (1はい 2いいえ) 科目 2 (1はい 2いいえ) 科目 3 (1はい 2いいえ)

学習の発展・方向性について

Q10：テーマをより深く探求したいと思えますか。
(1はい 2いいえ 3わからない)

Q11：いろいろな科目を広く学習したいと思いますか。
(1はい 2いいえ 3わからない)

Q12：社会活動(仕事・ボランティアなど)に活かしたいと思えますか。
(1はい 2いいえ 3わからない)

大学施設の利用について

Q13：利用したことのある施設をお伺いします。(複数回答可)
1 図書館 2 視聴覚教育センター 3 情報処理センター 4 アゴラグローバルカフェ
5 学食・生協売店 6 その他 ()

市民聴講生として今後期待・希望したいこと

Q14：聴講科目数(現在は3科目)を増やしてほしいですか。(1はい 2いいえ)

Q15：聴講科目に加えてほしい科目がありますか。
(1はい 2いいえ) ()

Q16：今後どのようなことを希望しますか。(複数回答可)

- 1 学生とのコミュニケーションの機会
- 2 聴講生同士のコミュニケーションの機会
- 3 教員とのコミュニケーションの機会
- 4 正規学生同様の指導・授業参加の機会
- 5 その他(具体的に ())

聴講してのご感想

Q4の聴講科目についてコメント・おすすめなどを自由にお書きください。

科目 1…

科目 2…

科目 3…

その他の感想、意見

聴講経験について

Q17：これまで市民聴講生としての受講した年度(前・後期別)に○をお付けください。

| 年度 | 2001 | 2002 | 2003 | 2004 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 |
|----|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| 前期 | | | | | | | | | | | |
| 後期 | | | | | | | | | | | |

Q18 これまでに外大で聴講した科目をお伺いします。

[]

Q19 現在進行中の外大以外の学習機会がありましたらお書きください。

[]

★ご自身についてお答えください。

居住市区町 () 市・区・町
 通学時間片道 () 時間 () 分
 通学手段 徒歩 () 分 自転車 () 分 電車・バス () 分
 年齢 () 才 男・女
 最終学歴 () 卒業

ご協力ありがとうございます。

回答は12月23日(金)までにアゴラグローバル2階 市民聴講窓口ボックスにお願いします。

市民聴講生の5W1H
東京外国語大学2011年度後期市民聴講生を
対象とする学習実態調査報告書
2012年3月
「生涯学習論」聴講生研究グループ
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
